注(10)　今は「但木土佐成行之墓」と建て替えられている。その右に並ぶ坂英力の「黄海漁夫之墓」も同時に「坂英力時秀之墓」となっている。

注(11)　p. 4の注(5)参照

資料　仙台郷土史夜話（三原良吉）

大和町史下巻（大和町）

23.　九思山とは

問　仙台陸軍幼年学校の校歌の歌詞に『九思山上歳寒の松嘯けば三神峯に』とあるが、この九思山とはどの山のことですか。

答　仙台陸軍幼年学校は、仙台陸軍地方幼年学校として明治30年9月仙台市榴岡に設立、軍縮で大正13年4月廃校となるまで、1－26期生を送り出しました。明治38年入校の第9期生50名〔第8期生の延期生を加えて55名〕が、記念事業として校庭の一隅に共同作業で作った築山が九思山であります。九思山の名は、第九期生の九にちなみ、国語漢文担当の平野彦次郎・高成田忠右衛門教官が、論語(1)季子篇から「九思」の語を選んで命名したものです。九思とは、君子が学を修め道に志すのに日常注意すべき九つの事項、即ち、視るには「明」を思い、聴くには「聡」を思い、色には「温」を思い、「貌」〔顔色。挙止〕には恭を思い、言には「忠」を思い、事には「敬」を思い、疑わしきことには「問」わんと思い、忿〔いかり〕には「難」を思い、得ることを見ては「義」を思う、この九つの徳目の名数が「九思」であります。出典の「論語」季氏編に『孔子曰君子有九思視思明聴思聡色思温貌思恭言思忠事思敬疑思問忿思難見得思義』とあります。

この九思山は、その後、代々の幼年学校生に受け継がれ、精神陶冶のシンボルとして、大きな影響を与える存在となっていました。この九思山について「山紫に水清き」（松下芳男編）に次の記事があります。『第九期生にちなんで、何か記念事業をという話が起ったのが、二年生の始めであった。このことを大沼生徒監に申し述べ、その賛成を得て、いろいろ審議しているうちに、同生徒監は山形聯隊に転任となり、池田信吉生徒監と交替した。池田生徒監もこの企を快く容れ、さらに審議を重ねた末、三年生の始めごろから、体操場の一隅に築山を作ることになり、放課後運動時間の一部をさいて、土盛作業を始め、明治四十年の暮小丘を完成した。そして榴ケ岡に因んで躑躅の苗を植えて「九思山」と命名した。翌四十一年の春には、躑躅の花が見〔美〕事に咲いて、われわれの卒業を美しく飾ってくれたように思われた。「九思」の由来は次のようであって、平野彦次郎、高成田忠右衛門二教官の選である。

九思（論語季子篇）

視は明を思い　　聴は聡を思い

色は温を思い　　貌は恭を思い

言は忠を思い　　事は敬を思い

疑は問を思い　　忿は難を思い

得るを見ては義を思う』

仙台陸軍地方幼年学校は、廃校後13年目の昭和12年４月、仙台幼年学校として復活しました。「山紫に水清き」（松下芳男編）に『昭和十二年四月一日、第四十一期生は入校した。十三年間の空白の頁を手早くめくって「仙幼史」は、ここに復興校史第一頁を書き出すこととなったのである。……復活の仙幼校第一期生たる第四十一期生は旧広幼校の校舎で入校式もまた開校式もあげた。……入校生は百五十名で、往時の三倍である。十一月二十二日戸山ケ原の東幼校の校舎に入って、昭和十三年一月六日〔仙台新校舎へ〕……』とあります。仙台市三神峯[2]の新築校舎に移ってから僅か７年後、昭和20年８月15日には終戦となり、49期生を以て仙台幼年学校は終幕を告げたのでした。この三神峯の新校地にも、かつての「九思山」に当るものを再建し、榴岡校舎以来の伝統を受継ぐことになりました。その「九思山」には、躑躅ではなく、特に節操堅強の象徴である松が植えられました。三神峯校舎の発足が、時恰も寒の入り、よってこの松は、「歳寒の松」と名づけられました。『九思山上歳寒の松嘯けば三神峰に』と校歌に詠み込まれたのは、この「九思山」のことであります。「山紫に水清き」（松下芳男編）に『中山政高（教頭、漢文）の回想記……三神峰という名称は、元幼年学校の跡に残った九思山上の歳寒の松、大正天皇御手植の松と共に、台上の桜、雄健神社、遥かに雪を戴く蔵王山、近く聳ゆる太白山、下に流れる名取川、広瀬川の清流、八木山青葉城址の景や、『大瀛〔たいえい〕潮の高鳴れば』と、校歌に唱われた太平洋の遠望等々、秀麗天下に誇り得る処で、毎日菊花の御紋章を拝しての仙幼健児の生活であった。』とあります。なお、この校歌が制定されたのは、昭和13年５月のことで、「山紫に水清き」（松下芳男編）に、次のように記[3]されています。『新校歌……その制定は、昭和十三年の第四十一期生、第四十二期生の在校時代であった。……五月十七日に発表会があった。』また仙台陸軍幼年学校からは多田駿[4]大将（１期）、板垣征四郎大将（２期）、石原莞爾中将（６期）らが出ており、太平洋戦争では、41・42期生らが多数戦死しています。ちなみに、三神峰校舎は終戦後、戦災で焼け出された旧制第二高等校（後に東北大教養部）の校舎として活用されました。

注(1)　四書の一。20篇。孔子の歿後、門弟などが、孔子と弟子・時人などとの問答、弟子達同志の問答、孔子の性行などを集録した古典。孔子研究の唯一の資料。孔子の理想的道徳「仁」の意義、政治・教育などの見解を述べている。わが国には応神天皇の時、百済から伝来した。p．288の注(4)をも参照。

注(2)　仙台市富沢字金山にあり、仙台平野を眺望できる標高約68*m*の小高い台地で、今は東北

大学教養部もなく、仙台幼年学校の旧校地一帯は、多品種の桜で知られる三神峯公園となっている。このあたりは縄文時代前期から中期にかけての集落跡である。遺跡地は、広さ約8万平方mに及び、過去に3度の発掘調査が行われており、その結果、台地の東端部付近から縄文前期初頭の竪穴住居跡が8軒検出されたのをはじめ、住居跡内や周辺部の遺物包含層からは、羽状縄文やループ紋、竹管文などの文様をもつ土器や、石鏃〔せきぞく〕、石匙〔せきひ〕、石槍〔せきそう〕、玦状〔けつじょう〕耳飾りなど石器が多量に発見され、この時期に大規模な集落が営まれていたことが判明した。このほか、遺跡内からは縄文中期の土器や土偶〔どぐう〕、土師器〔はじき〕、須恵器などの遺物も採集されており、南西部には2基の小円墳も見られる。また台地の南斜面には5世紀後半から6世紀頃にかけて埴輪〔はにわ〕を焼成していた富沢窯跡〔かまあと〕群がある。

注(3) 教官清水悟郎詩、教官佐藤益喜曲

(1)大瀛潮の高鳴れば　朔北山は雲を吐き　扶揺に打つや若鷹の　嵐に挑む陸奥に
菊花燦たり尊皇の　旗幟(ハタテ)ぞ靡く我武窓

(2)九思山上歳寒の　松嘯けば三神峰に　天籟高く和へつつ　御野立の跡いや聖(キヨ)み
競ふ健児の目庇(マナザシ)に　見よ黎明の星光る

(3)天霧(アマギ)る蔵王颪し来て　勁草萠ゆる名取野や　霞む牡鹿の陸(クガ)の果　太平洋は蒼穹(ソラ)浸す
雄大の風剛健の　気は秀麗の地にぞ凝る

(4)八紘一宇皇道の　世紀は明くる東より　ああ神洲の丈夫よ　汝等股肱と宣はす
五条の勅論(ミコト)畏みて　いざ励まばや諸共に

注(4) ただはやお。明治15年、電信技師多田　継を父として仙台に生まれた。電信学校、仙台陸軍地方幼年学校から陸軍士官学校（15期、砲兵）を経て、大正2年陸軍大学を卒業。参謀本部員、陸大教官の後、中国政府に招かれ北京で軍事教官、やがて昭和7年満洲国軍最高顧問となる。昭和10年支那駐屯軍司令官として発表した「多田声明」は、陸軍による華北自治権構想のはしりであった。日中戦争当時、参謀次長として蔣介石との和平交渉継続を主張したが、政府多数派、陸軍省強硬派に押し切られた。のち北支方面軍司令官、軍事参議官を歴任、昭和16年予備役に編入された。相馬黒光の従甥に当り、良識の将軍といわれた。昭和23年、67歳で歿した。

資料　山紫に水清き（松下芳男編）